



ベストセラーとなった「国家の品格」の著者であり、数学者の藤原正彦氏が、近著「管見妄語 卑怯（かんけいもうごひきょう）を映す鏡」で、東日本大震災後の1年について「戦後、これほど国民が一齐に立ち上がったことはなかったのではないかと述べ、「怒濤（どとう）のごとく」と評し、一般国民がボランティアで東北に駆け付けたことを指して、そう表現した。

一方で、敦賀市には、いまだ被災者が百人以上滞在し、逆に敦賀からも復興にむけて、仕事にボランティアに向かう方も多い。震災から3年目を迎え、東北から敦賀への「がれき処理」がなくなったように、ようやく復興の姿が見え始めた。また、原子力政策も少しずつ変化の兆しが見えてきた。とは言っても国のエネルギー政策こと、原子力政策の延長線上に敦賀市の現状があると言って過言ではない。今後のあり方を探ってみよう。



提言 〇 x 1

着実な原子力政策の推進を

国の経済産業省の総合資源エネルギー調査会は、新たなメンバーでエネルギー基本計画の論議を再開した。年内をめどに計画の見直し案を取りまとめる。

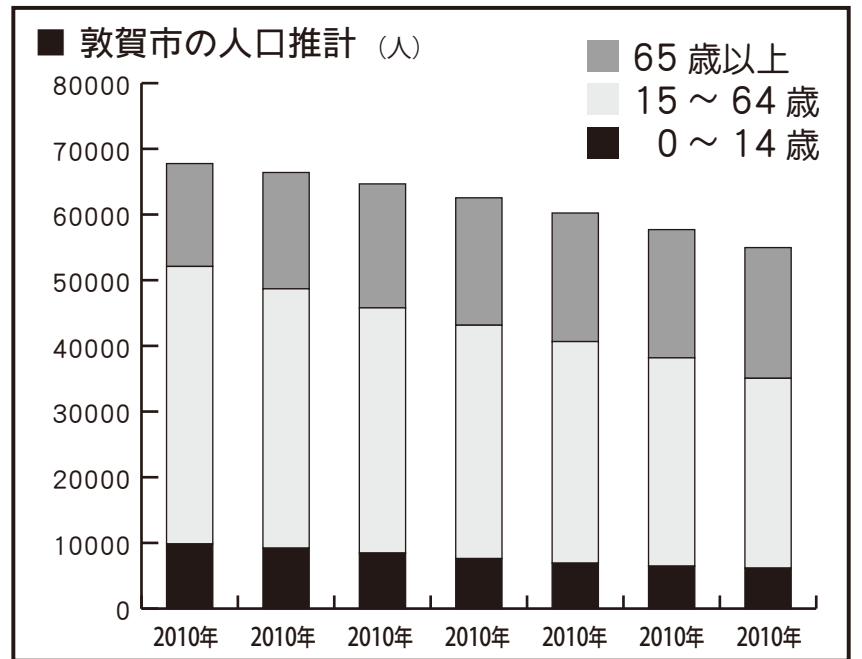
今回の調査会は、脱原発派を外すし、福井県の西川一誠知事らを加えるなどして、委員を25人から15人に減らした。建設的に意見集約する環境作りと、国の原子力政策の改善の一步をふみだした。原子力発電を立地する敦賀市としては、明るい兆しと受け止めたい。

敦賀市は、40年以上にわたり原子力と共に歩んできただけに、原子力発電所の長期停止と景気悪化となっていることは確かだ。また、少子高齢化、人口減少社会を迎えるだけに、資源のない日本において国のエネルギー基本計画の策定や原子力政策の着実な推進をのぞむものである。

原子力規制委員会の冷静で時間をかけた議論

安全の確保を大前提に、原子力発電を活用するか。地に足の着いた議論が肝要でもある。東日本大震災と福島事故から、3年目に入って政治に望むことは、怒濤とまではいかないまでも、着実な復興へ向け、また、妥当なエネルギー基本計画の策定など、もう政治の停滞や、足の引っ張り合いはご免被りたいということだ。

その延長線上に原子力規制委員会の見直しや敦賀2号機の破碎帯の十分な時間をかけた議論をのぞむ。なかでも、原子力規制委員会は、法律に基づき、独立性と公平性は大事だが、功を焦るような拙速とも思える動きがみられ、客観的かつ、説得力のある委員会とは思えない会合が多いのではないかと。敦賀2号機の破碎帯と活断層の議論も結論を急ぐことなく、じっくり冷静な議論展開を原子力規制委員会にのぞみたい。



提言 〇 x 2

看護大学申請と高齢者の増加

議会で市長がよく使う言葉に「PPK」がある。「ピンピンコロリ」の略。普段、元気で活動しながら突然、死が訪れる。医療費もかからず、家族を悩ますこともない。もうひとつ、「NNK」というものもある。「ネンネンコロリ」の略。寝ながら死が訪れるというもの。どちらがいいかと問われれば多くの方は「PPK」と答えるだろう。ところが現実には寝たきりになる人が増えている。

生活習慣病をはじめ、骨や筋肉が衰え、要介護から寝たきりとなる高齢者も多い。まずは、ウォーキングなど健康維持の活動が基本だ。高齢者もそうだが、40代、50代からの生活習慣も大事である。

日本人の平均寿命は伸びているが、健康で自立した生活を送ることができる健康寿命を伸ばすには「歩く」という機能を長く保たねばならない。



ところで、先月末、来年度の開学を目指す市立看護大の設置認可申請書を市長が文部科学省に提出した。今後、同省による審査が始まり、順調に進めば10月末に認可される見通しだ。基本計画書によると、看護学部看護学科を設け入学定員は50人、全体の定員は200人。開学時は教員15人でスタートし、17年度には29人体制となる。

市民の大学へ

最大の懸念は財政との見合い。基本は原子力発電所に支えられた財政があつての7万市民の大学。市税を毎年約3億円必要なだけに、看護師養成だけではなく、市民の大学とすることが大事だと考えている。大学関係者も大変だが、議会も市民も後戻りはできない選択をした。

(裏面に続く...)

財政上、厳しい状況も訪れるかもしれないが、最大の目的が看護師確保である大学だけに、敦賀市の医療を支える意味でも、この大学を最後まで支える覚悟も必要である。そのためには市民のための大学という覚悟とつながりが必要なことは、言うまでもない。

私のもうひとつの懸念は、その覚悟が市民にあるのか、無関心層が多く、なかには「本当に必要なんですか」という方も多いことだ。

春本番を迎えて、汗をかくのも心地よい季節。TPP という言葉がある。楽しく (T) 運動してピンピン (PP) した身体にとの略称。市立看護大学と、TPP の指導、PPK 運動と結びつけることができないうか、大学のあり方を考えてみたい。



提言 〇 x 3

敦賀のごみ問題と今後



瀬戸内海に直島と小豆島の間位置している島、豊島がある。人口 900 人、65 歳以上の高齢者が約半分の島である。かつては、豊島石が産出され、京都の桂離宮の石灯籠などに使われるなど、かつては石材業が盛んであった。今は、温州みかん、イチゴ、レモン栽培が行われている。

また、島の西部で起きた産業廃棄物不当投棄は日本最大級の問題となり、敦賀のごみ問題の生じる前でもあり、北條も何度か視察に訪れた。

今、島は、瀬戸内国際芸術祭の開催でアートの島として観光客が訪れる島に変わった。また、お隣の直島には、「ANDO MUSEUM」がオープン。日本を代表する建築家の安藤忠雄さんが 25 年間、直島で取り組んできた島再生事業のコンセプトを詰め込んだ美術施設だ。7 年前まで普通の人々が生活していた築 100 年の木造家屋など、外観を保存し内部に新しい命を吹き込んだものだ。

確実に進む水質改善

ところで、先月、許可容量の 1.3 倍を超えるごみが搬入された檜曲の民間最終処分場の環境保全対策協議会が、東郷公民館で開かれた。抜本対策工事が予定通り完了し、浄化効果も確認されていることが報告された。

漏水防止対策や水処理施設、浄化促進など、抜本対策工事が完了。木の芽川の水質が改善していることや、処分場の地下水位が低下傾向にあるなど、対策工事が効果が確認されていること報告された。

会議では、空気を注入して微生物で汚染物質を分解するなどの浄化促進対策事業について、実際の処分場で実施されるのははじめてではないか。壮大な実験のようなものだが、水質にも改善が見られ、成果が見られるとのこと、関係者のご苦労に敬意を表したい。

まだまだ、課題はあろうが、対策工事に 100 億円以上かけ、今後も、浄化に数千万円をかける必要がある。新年度以降も継続し、2015 年度末に効果を再検証した上で、必要に応じて実施内容を見直すとした。

豊島の全量撤去とは違うが、敦賀ゴミ問題の解決は、妥協的かもしれないが、最善の策に近い措置と理解している。観光地になった豊島、直島とは違うが、時間と手間がかかる作業が続くが、今後とも推移を見守り、その後を考える時期にも来ている。

336

「道徳なき経済は罪悪であり、経済なき道徳は寝言である」

江戸時代の農政家、二宮尊徳 (幼少時…二宮金次郎) の言葉である。先月、敦賀信金 80 周年を記念して、プラザ萬象前に「二宮尊徳翁像」を寄贈と記念講演会があった。

二宮尊徳は農政の指導者として、関東で 600 を越える村を復興させた実務家だ。その秘訣は経済活動を重視し、人々に利益をもたらすことで、取り組みを持続可能にすることだった。

資源のない日本の原子力政策に通じる言葉とも思う。原子力利用において、安全・安心と経済、さらには道徳のバランスが、今ほど大事なときはない。特に、40 年以上、原子力とともに歩んだ敦賀市において、経済、景気と医療、介護の福祉、さらには治安など総合的に考えることが重要と考える。

http://www4.ocn.ne.jp/~hojo1717/

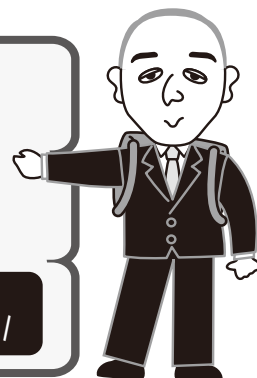
みなさまのご意見、ご要望をお寄せ下さい



発行責任者 / 市民クラブ
編集責任者 / 北條 正

敦賀市中央町 2 丁目 15-33-102
TEL・FAX 0770-22-9556
E-mail hojo714@gmail.com

ホームページ
http://www4.ocn.ne.jp/~hojo1717/



このニュースレターは、一部政務調査費で発行しています。